# 飛　翔

印西市立印旛中学校　学校だより
R4. 2. 1　　No. 25
発行　校長　三浦　明久

学校教育目標　自ら学ぶ意欲と豊かな心を育み、主体的に行動できる生徒の育成

【いじめ相談】：佐久間・秋本・小林・山田（礼）・明妻・井合

【セクハラ相談】：佐久間・布施・明妻・高橋・小林・井合

## 暦（こよみ）としての２月は・・・

２月が始まりました。２月といって一番に思い浮かべるのは「節分」です。節分とは季節を分ける日のことで、立春・立夏・立秋・立冬それぞれの前日のことです。日本では、立春を１年のはじまりとして尊ばれていたために、春の節分のことを言うようになりました。節分に豆をまくのは「豆」は「魔滅」に通じているということ、そして、「魔の目」に豆を投げ、「魔を滅する」ことに通じています。ちなみに、豆まきに使う豆は、芽が出ると縁起が悪いので、炒った豆が良いとされています。

今年度も残り２ヶ月となりました。生徒の皆さんにはしっかりと１年間の中学校生活のまとめをしてほしいと思います。

## 冬季オリンピック・パラリンピック、間もなく開幕です

お隣の国、中国北京で２月４日から冬季オリンピックが、３月４日から冬季パラリンピックが開催されます。まず、最初に始まる冬季オリンピックには１２４名の選手団で臨みます。１月２９日に選手団の結団式で主将のスピードスケートの高木美帆さんが「冬季競技の活躍が日本中に勇気と明るさを届け、社会の未来への希望となれるよう力を尽くして戦うことを誓います」と話されました。

今と同じくコロナ禍ではありましたが、昨夏の東京オリンピック・パラリンピックでの日本選手達の戦う姿に大きな勇気と感動をもらった記憶がまだ新しいところです。一つのこと（スポーツ）に一心不乱に打ち込む姿は誰もが心から応援したくなります。この大会を通じて、昨夏の東京大会と同様、子供や若者たちにもスポーツに関係することだけでなく、将来の夢や目標を大きく膨らませるきっかけづくりになる大会だとも思います。

今回も、コロナ禍の厳戒ムードでむかえる大会になりますが、４年に一度の輝く瞬間を目指してきた選手達が最高のパフォーマンスができることを願わずにはいられません。

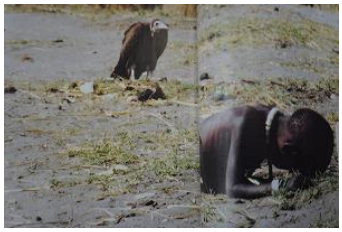
## 学校からの再度のお願い

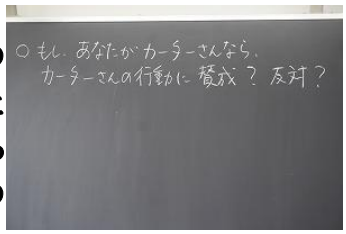
過日、学校連絡メールや学年だより、学級通信等でもお知らせしましたが、緊急時において家庭と学校間で連絡が取りやすいように①ｗｅｂによる健康観察結果の入力、②「スクリレ」アプリの登録を再度お願いいたします。保護者の方々のお手元に案内文が見当たらない場合は、学級担任までお知らせください。現在、毎日、お子様が Chromebook を持ち帰るようにしております。緊急時（臨時休校等）を想定してのことですので、ご理解とご協力をお願いいたします。

## 授業（道徳科）を参観して・・・

先週、３年生の道徳の授業を参観しました。「ハゲワシと少女」という道徳の教科書に掲載されている教材で行われている授業でした。

１９９４年、ハゲワシが餓死寸前の少女を狙っている『ハゲワシと少女』という写真（スーダンで撮影）でピューリッツァー賞を受賞したケビン・カーターさんの話です。写真が撮影されたのは１９９３年、この写真がニューヨークタイムズ紙（１９９３年３月２６日付け）に掲載されると多くの批判が寄せられました。大部分が、写真を撮る以前に少女を助けるべきではないかという人道上からのものでした。この写真は「報道か人命か」という問題として、その後、何度かメディアで取り上げられ、論争に発展しました。この教材を扱うと、多くの授業で中心発問、いわゆる最も生徒に考えさせたいこととして、問うのは「カーターさんの行為に賛成か反対か」となります。続いての問いは「あなたがカーターさんなら・・・」と考えさせることが多いように思います。たった１枚の写真から焦点化して議論するためには、どちらも核心をつく問いです。当時のスーダンの国内事情やカーターさん自身の人間性などを知った上でという前提条件を加えると議論はさらに深まっていきます。






当時のスーダンという国は、１９８３年から続く内戦と干ばつの影響のためスーダンで子供たちを中心に深刻な飢餓が起こっていたということがあります。カーターさんたちが訪れた食糧配給所があるアヨドという村では、飢えや伝染病で１日に１０人から１５人の子供たちが亡くなっていたという悲しい現実がありました。

この写真撮影時にカーターさんと同じ現場で取材していたフォトジャーナリストの証言によれば、写真の構図は母親が食糧を手に入れようと子どもを地面に置いた短い時間のことだったそうです。カーターさんは撮影後、ハゲワシを追い払い、少女は立ち上がり国際連合の食糧配給センターの方へよろよろと歩き出したそうです。その少女を見た後、彼は木陰まで行って、しばらく泣き続けた姿が目撃されています。

全ての事実がつまびらかにされた上で、この写真についての議論がなされれば、「報道か人命か」とは必ずしもならなかったのではないでしょうか。逆に、この写真が世に公表されていなければ、困っている他国の状況を知る機会は世界中の人には与えられなかったのではないでしょうか。少なくとも、「内戦」、「干ばつ」、「飢餓」、「伝染病」という問題に縁遠い日本を含む多くの国々には考えるきっかけさえも与えられなかったはずです。この１枚の写真のように、全ての事実ではなく、切り取られた一部の情報の扱いは難しいと改めて考えさせられた授業の１コマでもありました。

道徳の授業に限らず、進路実現に向けて、日々の３年生の真剣な授業への取り組む態度を見ながら、彼らが将来、社会人となった時、情報に押し流されず、自分の英知を結集して、正しく情報を選択し、例えば、今のコロナ禍のような状況の時には正しく恐れ、解決へ向けての正しい世論形成ができる人間を目指してほしいと思います。

いつも生徒の皆さんにお願いしている自分の考え方、生き方についてしっかり向き合い、「自問自答」できる人間であってほしいと改めてお願いしたい気持ちでいっぱいです。